

野間宏『真空地帯』論

——「大衆と共感し、共応し合う世界」の造形

尾 西 康 充

1

作家土方鐵は、部落解放同盟の大会の出席者控室で、野間宏につきぎのように語りかけた。「『真空地帯』の木谷は、同和地域出身者として書きたかったのではないか」と。野間と大変親しく、この場に居合わせた太田恭治氏（リパティおおさか元学芸員）によれば、「野間はそのように書きたかったけれど、書けなかった。そういう時代ではなかった」と往時を回想する¹⁾。

『真空地帯』（一九五二年二月、河出書房書下ろし長篇）では、木谷利一郎一等兵は応召前、「西成の鶴見橋」にある兄喜一郎の家に寄寓していた。兄は、南海沿線の萩之茶屋駅近くの鶴見橋通りで、帽子屋を営んでいた。兄の家の庭一面に「ぼろの山」が広がり、「ぼろはまるで魚か牛のはらわたのように、さむそうにそこにのびている」と描写される。「野間は、本来は靴職人として書きたかったの

ではないか。しかし、野間自身が深くかわった解放運動のテーマは『青年の環』に譲り、『真空地帯』では、軍紀と軍法会議に縛られた兵隊の実態、とりわけ軍法会議で有罪判決を受けて大阪陸軍刑務所に入所した自分の過去を描き出したかったのではないかと、太田氏は語る。たしかに野間も「なぜ被差別部落を主人公にしなかったか」というと、『青年の環』という作品があって、それは被差別部落の問題を展開している。だからそれと重ならないようにするためにね」と説明している²⁾。

『真空地帯』のなかで、木谷の兄の帽子屋を訪れた曾田原二一等兵は、「このような場末の商店はじめてだった。その店のなかはあまりにもきたなかった」と感じる。木谷と彼の兄との間には「全然似たところがなかった」ものの、「この二人には同じようにひとの何かをうかがいつづけているところがあるようだ」とする。後、暗い何かがあると思われたのである。

軍法会議公判報告には、木谷の経歴が「兵庫県鳴尾村字××の農業木谷喜一の次男に生まれた」と記されている。この「字××」は、当時差別を受けていた「夙」という地域であったとされる。野間は六歳のとき鳴尾村字中津（西宮市今津）に転居したことから、その周辺地域は、彼自身の生い立ちにつながる。野間によれば、「広々とした麦畑」を通り抜けて今津小学校に通った少年の日、「田と畑で働いている農家の人たちとしたしかった」という³。野間は日高六郎との対談のなかで、「木谷も自分自身がそういう出身であることは知らないんですね。知らないんだけど、劣等感がずっと染み込んでいるわけです」と発言している⁴。軍法会議において有罪となったのは、木谷の場合、巡察に來た士官の金入れを盗ったことと軍機密を洩らしたことであった。他方、野間は京都帝国大学在学時代から参加していた左翼運動に対する治安維持法違反の容疑であった。いづれも兵士としては致命的ともいえる後ろ、暗い経歴を持っていたことが「劣等感」を抱く原因になっていたのである。

野間は軍隊の非人間性を暴くことを『真空地帯』のテーマに設定したといえる。しかし曾田が馬運動で落とした蹄鉄の代わりを染が手配する、安西二等兵の不寝番を弓山二等兵が交代するなど、殺伐とした兵営生活でありながら、兵士たちが支え合うというモチーフが現れるのである。作品のクライマックスには、異なる過去を背負った主人公（曾田、木谷、染）が心理的に交感するという場面が描か

れる。「かばう」（「匿う」という行為は、野間にとって重要な「西浜体験」から由来するものであったのではないか。この作品に部落解放運動を直接取りあげなかったものの、野間は社会運動の理想——「大衆と共感し、共応し合う世界」をつくりだしていく——を投影していたと思われるのである。ただし残念ながら、それを十分に発展させられないまま作品が終わってしまう。なぜそのような結末を迎えることになったのか、以下その経緯を検証してみよう。

2

大阪市営地下鉄花園駅と南海高野線津守駅を結ぶ東西約一キロの鶴見橋商店街は、戦前、大日本紡績（ユニチカ）津守工場に通勤する従業員で賑わった。そのまま西に向かって木津川を渡れば大正区、ウチナンチュ（沖縄人）のコミュニティが形成されていた。他方、北にある浪速区西浜地域は皮革産業が盛んな場所であった。大正の後半に人口が増加し、そこから溢れた人びとが鶴見橋周辺に移り住むようになった⁵。商店街には靴屋の店舗が数多くみられるが、現在では在日コリアンが店主を務めるケースが増えている。

『特高月報』（昭和一八年二月分）には、「大阪市西成区鶴見橋通五ノ三町会長代理泉三郎」が大阪府知事宛てに送った「反戦不敬投書」事件がとりあげられている。この投書は、総力戦体制下での民衆の不満を率直に表している。「聖戦茲に七年を迎へ是と言ふ戦果

も見当らない今政府は何をして居るのだ」という言葉からはじまって金属供出を強く批判し、「是れ以上吾吾を苦しめるのなら戦争に敗れても楽だ」で終わる。西浜水平社や今宮水平社が取り組んだ社会運動は、日中戦争勃発後の「皮革使用統制」に対して、靴履物業者や靴修繕業者の生活を守ろうとした松田喜一の浪速区経済更生会の活動につながる。一九三八年四月から四一年一〇月までの間、大阪市役所社会部福利課融和係に勤めていた野間は、松田の経済更生運動にかかわっていた。前出の太田氏によれば、野間を尾行していた特高警察は今宮駅まで来るといつもそこで引き返した。野間は地域にもぐる、ことよってかえって自由を得たのである。「融和講習」と称して唯物弁証法を論じていたこともあったという。

『真空地帯』には、自分の兄の家がどの辺りにあるのか、木谷は「もう曾田にそのようなことについては、かくそうとは思わなかった。彼はむしろいまはこの相手に自分の事件をすっかりつたえてしまいたい欲望にとりつかれていた」とある。木谷が曾田に親近感を抱ききっかけになったのは、木谷の前科を知っているにもかかわらず好意を示してくれたことや、大学を卒業した身分でありながら幹部候補生を志願しなかったからである。幹部候補生になれば、入営後一〇カ月で見習士官となって営外居住も可能であった。木谷には、自分をおとしめて軍法会議に付した将校たちに対する憎悪があったが、曾田は「はっきりした反戦的な社会主義的な思想」を持って

いた。しかし過剰な思い入れを抱いているために、軍の機密を営外に漏らした木谷に、自分に通じる「思想犯」の隠れた顔を見出すと同時に、「ちらと自分が陸軍刑務所にはいらなければならぬかも知れないということを考えた」のである。

木谷が入営したのは一九四〇年と推定できる。作品の時間は一九四四年一月と設定されるのだが、その間に戦局の悪化した様子が随所に描かれている。たとえば、連隊の副官の階級が大尉から中尉に下がっていたり、ストーブの燃料が石炭から薪に替わっていたりした。「二装用（正装用）」としてすべての兵隊に支給されていた「ラシャ服」は、班長以外にはほとんどが持っていなかった。木谷とともに入営した現役兵は「大半中支へ渡ってしまっており」、部隊には「次々と召集された幾種類もの補充兵」の他に「第一回学徒出陣兵」が入隊していた。学徒出陣兵は入営して一〇カ月後には見習士官将校になる。初年兵係の地野上等兵が学徒出陣兵に対して「お前ら毎晩将校室でガブガブお茶のみくさって雑誌よんでやがるということやなあ」と敵意をあらわにする場面がある。

とりわけ「親はどこかの会社の部長とか課長」である安西二等兵は、インテリ学徒出陣兵の典型である。安西と田川二等兵が「汁桶を一掉」ひっくり返したために、地野に殴り倒される。木谷は、彼らを見て「のろのろした匂いぶりが不思議だった」。安西の「苦しげに歯をくいしばった様子がたえられなかった。古い教育をうけた木

谷にはこれが一体兵隊なんだろうかというような気がした」。入営時期がわずか四年ほどしか違わないにもかかわらず、共感を欠かさせてしまうのは、彼らと木谷との間に出身階層や学歴のちがいがあることに加えて、木谷の精神と肉体に帝国陸軍の兵士という規範が深く刷り込まれているからである。同年兵の四分の一度度しかなれない上等兵に、木谷はスムーズに進級できていた。「将校たちの腐敗した勢力あらし」に巻き込まれたとはいえ、経理室で巧みに振る舞っていたわけであるし、大阪陸軍刑務所に服役してからは看守の「協力者」になって「官品を着服する」手助けをおこなっていた。つまり軍隊内の処世術に長けていたのであり、彼が本当に帝国陸軍を内破できる志向性を備えているのかどうか、疑いを抱かせる。

作品のなかで、曾田は木谷とはつねに対照的に描かれる。三年兵の補充兵である曾田は応召前、経済学と歴史学を教える中学校教員であった。そして彼の実家は、大阪市の住吉公園付近——南海本線萩之茶屋駅から南へ約二五分の距離——で、そこは住吉大社を中心とする閑静な住宅街であった。しかし彼にしても、学徒出陣兵たちが「あまりにもはやくほとんど自分自身を失ってしまった」ことや、「みるみる自分のなかにもっている弱点をあらわにした」ことを目の当たりにすると、複雑な思いにとらわれる。「人間のなかから無残にもあらゆるものをあばきたてる軍隊に対する憎しみ」のみならず、「彼ら大学生に対する嫌悪感が湧き上がってくるのをふせ

ぐことができなかった」からである。一九三〇年代に大学を卒業した曾田は「学生時代からつづいた彼の思想上の不安定な状態、それからくる心理的な動揺」を抱えていた。戦争とファシズムに抵抗する学生運動にかかわっていた曾田——退潮する学生運動の「暗い花ざかり」のなかで「自分自身に対する不満と社会制度に対する憎悪」（『暗い絵』、一九四六年）に身を焦がしていたにちがいない——の眼には、四〇年代の大学生は、思想上の葛藤とは無縁の自己中心的な生き方——「エゴイズムに基づく自己保存と我執の臭い」（『同』）——しかできないようにみえたのではないか。

3

大阪市西成区山王町にある飛田遊廓は、『真空地帯』を読み解くうえで重要な地である。木谷は逮捕される前、山海楼の花枝と関係を持っていた。経理委員であった林信二中尉は、廓内に軍の書類を忘失するという「飛田遊廓事件」を起こした。被服服の成山兵長や染一等兵、安西二等兵たちも飛田遊廓に出入りしている。

近世身分制と周縁社会に関する研究によれば、大阪には天王寺垣外、薦田垣外、道頓堀垣外、天満垣外の四か所に「非人」身分の人びとが垣外仲間を形成して居住していた。薦田には刑場と墓地——近代に入るとその地には、電光社というマッチ工場が設けられ、棋士坂田三吉が同社の寮に寄寓していた——があり、それらを管理

する職能集団が存したのである。大正に入ると、大火によって焼失した難波新天地遊廓の代替地として、鳶田から少し東南の飛田新地に遊廓が設けられた。『悪所』の民族誌 色町・芝居町のトポロジ』を執筆した沖浦和光によれば、戦前の大阪には「釜ヶ崎・飛田・西浜」という「強い負性のイメージ」で語られてきた土地があった。近世から「悪所」と呼ばれてきた地域は「色里・遊里」、「芝居町」、「被差別民の集落」という三つの条件が重なるように形成されていた。「釜ヶ崎・飛田・西浜」はまさに、これらの条件がすべて揃う「典型的な「場」であったという。

木谷は、軍検閲を受けずに花枝に出した手紙のなかに、「動員その他重要な軍の機密」を漏らすだけでなく、上官を罵ったり訓練をことさら悲惨なものに書いたりしたとされる。しかしそれが確固たる「反軍思想」からもたらされた行動であったのか、曾田は疑問を抱く。軍法会議では、木谷が「少年時代より不規律な生活をつづけてきた」ことが「軍隊の規律をなおざりにする傾向」を生んだり、「上官に対する許すべからざる反抗的な態度」をとらせたりしたとみなされた。恵まれない生い立ちによる自堕落なふるまいが「反軍的な精神態度」に結びついたとされる。だがそのなかには、「軍法会議！それはあるいは今後の曾田を待っているかもしれないのだ」という恐怖を抱く曾田の「反軍思想」に通じるところがあるのだろうか。射撃場の横のポプラの樹の下に所持金を隠すことと、陣営具倉庫の

戸棚に「経済学の本」を隠したこととの間には、彼らが後ろ、暗い、何かを持っていたとしかいえないのである。木谷は曾田に対して、つぎのように述べた。

「一体、反軍思想などというものをこの俺がどこにもっていったか、また不穏な考え方などと検察官はいいやがるけど、……そんなことはみんな全くでたらめで勝手に向こうでつくったことしらえごとなんや。この軍隊がすぎな兵隊なんて一体どこにいるやろか、日本中さがしていたら、おめにかかりたいわ……。軍隊がいや、はようかえりたいいうことくらいはだれでも、兵隊ならばいつもいうてることやないか。しかし兵隊はやな、いくら口ではそういうても、この日本のくのためにつくす気持はみんな心の底にはもってるんや。」

木谷は、上官が兵士に接する態度が「まるで鬼畜のごときもの」であることや、将校の証言が正しくて兵士は嘘ばかり言うこととみなされる軍法会議の取り調べに対して、強い憤りを感じている。しかしその一方で、厭戦感情を持つものの、「この日本のくのためにつくす気持ち」は共有しているという。「将校商売、下土勝手、兵隊ばかりが国のため」といって将校や下士官への憎悪はあったものの、根本的に反戦・反軍思想を持っていないのであった。

敗戦が近づいた頃、大陸に派遣されていた部隊の軍紀は乱れる傾向にあった。現在、軍による廃棄処分をまぬがれた軍法会議の資料

の一部が公開されている。陸軍第一三軍独立混成第九〇旅団に所属する奈良県北葛城郡の一等兵は、江蘇省に駐屯している間に、逃亡・横領・窃盗の容疑で憲兵に逮捕された。判決文には、この一等兵の経歴が「幼少ヨリ家庭愛二患マレスシテ成長」し、窃盗罪で姫路刑務所に服役した。江蘇省で警備勤務中、疑似赤痢のために陸軍病院に入るが、退院後には帰隊せず、かねてから交際していた現地女性と情交を遂げ、「慰安所等二於テ遊興ヲ続ケ」ていた。逃走中に中国人で編成された保安隊に防毒マスクと外套を売却して代金を横領、別の保安隊から拳銃を窃取した——。結局これらの容疑に対して、懲役三年の判決が下った。不幸な家庭環境であったことや、遊惰におちいりがちな性格であったことが判決文では強調されているが、木谷のケースと照らし合わせれば、それらは容疑者の特徴を描き出す常套表現であったことが分かる。

他方、軍機保護法は一九三七年に改悪され、軍事機密の対象範囲が拡大されるとともに、刑罰が強化された。取締りの対象は「作戦、用兵、動員、出師其ノ他軍事上秘密ヲ要スル事項又ハ凶書物」を「探知シ又ハ収集」すること、および「他人ニ漏泄」することであった。「事項又ハ凶書物」の具体的な内容は、陸軍大臣または海軍大臣が命令して定めるとされた。いくらでも拡大解釈が許され、制限のない法律であった。さらに機密の探知・収集・漏洩を目的として「団

体ヲ組織シタル者又ハ其ノ団体ノ指導者タル任務ニ従事シタル者」も処罰された。もし違反すれば「無期又ハ二年以上ノ懲役」という処分が準備されていた。憲兵隊は軍機保護法や陸軍刑法を使って、反戦・反軍思想を社会から一掃し、軍に関することには一切口を開かせないという言論統制をおこなったのである。このような思想弾圧に関して、荻野富士夫氏は、「防諜を名として憲兵が国民生活のすみずみにまで監視の目を光らせ、自らが「苛察」と認めるほどの些細な流言蜚語などが取締まられていた」とする。窃盗罪は刑法第二三五条で「懲役一〇年以下」とされていた。看守たちが「半年、多くて八カ月くらい」の刑と噂していた木谷の軍法会議では、軍機保護法違反が罪状に加わったので、二年三か月という長い刑期になったのである。

4

木谷の兄の家を訪問した後、曾田は住吉公園にある自分の実家に立ち寄る。母親と許嫁の時に会う。母親は、曾田が外地から帰還してきたとき「既に自分の手元にかえてきたものと考えているよ」のだが、曾田は決してかえていないなどということはできなかった。彼は兵隊だった」と描写される。それは曾田自身、「ラッパが支配」し「一丁四方の堀」に囲まれた兵営という「真空地帯におかれた自分」の立場を強く意識していたからである。しかし曾田は、「真空

地帯におかれた自分」を決して甘受していかないことを示すために、家族の期待を裏切っても上等兵に進級しようとはしない。そしてさらに、「真空地帯」を打破するために「女のあげる細い悲鳴をもとめていた」。彼によれば、「そいつをやれば、たしかにその時、真空地帯の上に虹がかかる。彼はその虹の上をわたって地帯の外へ出て行くのだ。どこか外へ、……遠いところへ、こえて行くのだ」と考えられたからである。

彼のようなあまり遊びを求めることのなかった人間も、外地に一年ばかりいる間に、女との接触に対する反省はルーズになり、病気をおそれる心はなくなっていたので、このような比較も思いつけるのだが、彼はここで少しばかりわからなくなる。

しかし兵隊であるかぎりは、こうなのであると彼は思うのだが、曾田が飛田遊廓に足を運ぶ場面は出てこないが、外地では慰安所に通っていたことが暗示される。「野戦からかえってきた曾田をどういう風に取り扱っていいのかわからないでいる」時子は、曾田から求められると、「以前は彼女は母親に気をくばって身を引いたが、いまは何もいわず、暗いような抗議する眼で彼をみた。彼女は体かたくしてちょっと自分自身に抵抗したが、半ば兵隊に奉仕する感じもあった」。曾田には、「この日本のくのためにつくす気持ち」は希薄だが、時子には、曾田もまた「日本のく」のためには自己の犠牲を厭わない他の兵士たちと同じであると思われる、あえて不

快感を抑えて「兵隊に奉仕する」態度をとったのである。軍隊の本質とされる不可視の『真空地帯』は、その内部を減圧して構成員の自由を奪うだけでなく、外部に対しては加圧して、軍事的な侵略やジェンダー差別を発生させている。橋本あゆみ氏は、『真空地帯』が「被害者としての兵士を前面に押し出した」のに対して、大西巨人の『神聖悲劇』（一九六〇〜八〇年）は「戦場での兵士の加害（殺さなければ殺されるという「現実」）をも「あたりまえ」でないものとして可視化し、戦場で人間がいかに行爲すべきかに思考の道を開いたといえるだろう」と指摘している¹⁰。

作品のなかでは、「徒弟制度と軍隊制度が生んだ一つの典型的な人間」である地野上等兵が初年兵時代の曾田に「執拗な仕打ち」をして、暴力を浴びせかけている。地野は応召前、「出面、一円八十銭」の「土運び」の仕事に就いていた。曾田は、凄まじい暴力による初年兵教育を通じて、自己のあらゆる属性を奪われた帝国陸軍の兵士の一員と化し、女性に対する性暴力を意に介さないようになっていたのである。ただし『暗い絵』のなかに描かれるように、反戦・反軍思想を抱く学生運動のメンバーであっても、「精力の始末なら、半封建性に出かけるよ」と木山省吾が遊廓に通うことを是認していた時代ではあったのだが……。

染一等兵は「一つの怪物が、ヨーロッパをあるきまわっている、共産主義の怪物が」という『共産党宣言』冒頭の言葉を兵営内で口

にする。実家が鉄工所で、兄が共產党にかかわって刑務所に入れられている。このような経歴を持った染は、エゴイストの安西に嫌悪感を抱いていた。「馬手入れのやり方がわるい、お前はあらゆる点でずるい」といって安西を殴打し突き飛ばし、「馬の飼」を喰わせて長い間ふくれあがらせた。その結果、安西が身をひそめてしまふという事件が発生した。実際には安西は「厩の横につきあげた乾草の山の隙間」に身を隠していたのだが、機関銃中隊の学徒出陣兵が便所のなかで縊死したという噂が広がっていたので、班内は大騒ぎになった。結局、染は営倉入りの処分になったのに対して、「学徒兵には地方人の注目」が集まっているので扱いには配慮するようにとの部隊長の発言があったことや、二カ月前に入隊したばかりで第一期検閲もまだおこなわれていなかったことなどから、安西は外出禁止という軽い処分になった。

折から独立歩兵部隊要員編成のために一五名の兵士を出せという通達が中隊からきていた。曾田の班では、東出、佐野、内村、世古の四名の補充兵が選ばれたのだが、木谷が自分の味方だと信じ込んでいた炊事班長の金子軍曹の差し金で、内村に替わって木谷が入れることになった。「扇町の方の紙問屋の重役」で「以前その地域の方面委員」を務めていた内村の父親は、立沢准尉の自宅を訪れて、息子が野戦行きから外れるように依頼していたことも功を奏した。そのいきさつを知った曾田は「罰せられることを決心して」、木谷

にそれを話そうと思う。しかし木谷がそれを知ればおそらく逃亡企てるにちがいない。そうなれば曾田は「木谷に動員の機密を不必要なときにもらしたという理由で罰せられるだろう」と感じる。彼もまた軍機保護法違反で逮捕される危険が生じるのである。

5

兵営で木谷の「四年兵の監獄がえりのパッチ」がはじまると地野や今井上等兵、他の三年兵に加えて曾田も殴打された。「木谷はその打撃を少しもゆるめることなく力いっぱい拳骨で曾田の頬をなぐった」のである。曾田は、自分が「あれだけ木谷のことを考えていろいろしてやっている人間」だから「木谷と自分とは同じ立場に立つことができると考えていた」にもかかわらず、「パッチ」の対象になったことに憤りを感じる。

営倉に染を見舞った曾田は、染から「刑務所くらいがなんぞんねん……」という言葉とともに、木谷の秘密を洩らしたのは成山兵長であったにちがいない、と教えられる。そこでようやく、これまで自分が雑報綴の犯罪情報の記事を鵜呑みにしていたことに気づく。木谷の事件の「罪はたしかにそのすべてをこの軍隊に帰することができる」といえることがはっきりとしている」にもかかわらず、「監獄がえり」であるために彼を信頼しなかったのである。反戦・反軍思想を貫徹せずに忸怩たる思いを抱きながらも、染のようにには肚をく

くることができず、あろうことか木谷をおとし入れた軍組織の側に立って状況を眺めていたのである。これに気づいたとき、曾田は「あの木谷の打った拳骨の打撃が自分の体をとらえているものをこなごなに打ちくだくのを感じた。木谷の手は真空地帯をうちこわす」ことを察知するのであった。

この直後、曾田は木谷に真相を打ち明ける。師団上層部を巻き込んだの策謀によって冤罪を着せられたことを知った木谷は憤り、報復のために実力行使に出ようとする。いくら探しても金子をみつけないことができなかったが、偶然、二中隊の舎前で林中尉を発見する。木谷の事件の後、林は南方への輸送機関へ転属となるものの、船中、病気で倒れ、内地送還となって全国の陸軍病院を転々としていた。謝罪の言葉を口にしようとする林に対して、「そんな言うことを、いまごろきかんで、俺はきかんで……」と、「兵隊の言葉でない言葉を木谷は口から出したのだ」と描写される。この瞬間こそ、まさに木谷が人間の言葉を取り戻し、自己の人間性を回復させた時であった。この後一旦は自分の営舎に戻るが、再び林のもとを訪れ、彼をしたたかに殴りつける。ここにも自己の身体をもって「真空地帯をうちこわす」木谷の姿がみられる。さらに事務室の立沢のところへいって、なぜ自分が野戦行きになったのか、中堀——金子の策謀を暴露しようとする。立沢に詰め寄った木谷を事務室の外に出せと曾田は命令される。

「曾田！ はやく、つれて行かんか。」烈しい声で准尉は言った。木谷は曾田が自分の方へ歩いてくるのを見た。その顔の白いのを見た。彼はいま曾田からきいた、金子軍曹と准尉の間にかわされた話をぜんぶぶちまけてしまおうと考えていた。しかし自分の方へやってくる曾田を見ると、彼の口はひらかれなかった。

ちょうどそのとき衛兵にとまなわれて営倉から染が帰ってくる。准尉による説論を受けた染も加わって曾田と木谷は兵舎に戻ろうとする。曾田が「木谷はん、金子班長の話、自分からきいたと准尉さんに言うてくれはっても、いいですよ」というのだが、「いいや、ええよ」と木谷が応える。不正や隠べいを意に介さない軍の官僚的体質に驚かされる一方、師団に及んだ不正を准尉に糾弾せず、林を殴っただけで個人的な恨みを取めってしまう木谷の態度からは、本当に「真空地帯をうちこわす」ほどの志向性があるのかどうか、疑わしい。だが、この場面で木谷が曾田をかばったことはたしかである。「監獄がえりのバッチ」を木谷から喰らって憤りはしたものの、作品の終盤に至って曾田は木谷と、そして染との間で静かに共感する瞬間が訪れるのである。

木谷と曾田の関係について、大西巨人は「全篇を貫通するインテリゲンチャ侮蔑の感情」とともに「一種の大衆追随主義・俗情との結託」がみられると批判した¹⁾。大きなインパクトを持った大西のこの発言以来、『真空地帯』を読むに際して、日本共産党の五〇年間

題に端を發し、「新日本文学」と「人民文学」に分裂するまでに悪化した社会状況を考慮することが求められるようになった。野間は一九四三年から四四年にかけて、文京区の居住細胞として地域人民闘争に積極的に関わり、闘争に取材した短編小説を発表していた。

たしかにそのとき、あらゆる階層の市民との強い結びつきを感じていた。^⑭ここで着目したいのは、クライマックスの場面で木谷が、曾田を道連れにして戦闘的になるのではなく、逃亡という手段を選んだことである。カストロロフに至る決定的な闘いを回避し、木谷が曾田をかばったことによって、彼らの間に心理的な交感が生じたのである。小説の構成上、これが消極的な展開であったことはまちがいないのだが、野間は、非人間的な世界である軍隊のなかにありながら人間性を取り戻した兵士の姿を描こうとしたのである。

さきにも触れた沖浦和光は、『真空地帯』をその当時の一連の人民闘争小説の系譜の中に位置づけることは間違えている」とする。沖浦によれば、「木谷のイメージは、毎日のように通った西浜で、作者の脳裡に深く刻み込まれた多彩な人間像から構築されたのだ。すなわち、作者のイデオロギー的な理念の所産ではなくて、『西浜体験』から感得され造型された底辺の民衆であった」という。^⑮官憲の弾圧によって社会運動が瀕死におちいった一九三五年頃、「反戦反ファシズムの旗を掲げて大衆運動として最後まで頑張った」のが「大阪の港南地方の労働者」であった。^⑯そして、その「大きい一翼

を担ったのが木津川べりの部落の労働者と在日朝鮮人」であったとされる。対談『聖と賤の文化史』のなかで、沖浦が「あの苦難の時代、官憲に迫られた運動家が部落に匿われた者も少なくなかった」というと、野間はつぎのように応答する。

ええ、イデオロギーを超えたところで匿うんですね。部落の大衆はことこまかい思想の問題はよく分からないにしても、同じように権力に抑圧されてきた仲間としてかばう。まあ、いうなら義理ですよ。迷路みたいな小路に古い長屋がびっしり立て込んでいるから、官憲もおいそれとは入れない。結束の固い長屋の人情が厚い防波堤になっていたし、長年身についた反権力意識でみんな身構えていたし……。^⑰

曾田と木谷、染の間に分かち合われた共感には、労働者と知識人が連帯する人民戦線運動、靴修繕業者組合の事務所によってきた憲兵軍曹を追い返したという松田喜一による部落解放運動など、『西浜体験』を通じて野間が理想としていた人びとの絆——「大衆と共感し、共応し合う世界」——に通じるものがあったのではないか。野間自身も憲兵によって逮捕された後、検察官の尋問に対して、同志に累が及ばないように配慮しながら「港南グループのことなども一言も述べなかった」という（軍法会議とその後）、「新日本文学」第一一卷第九号、一九五六年九月）。厳しい教練によって個人の身体と精神を帝国陸軍兵士の規格に馴致させるのが軍隊組織である。

しかし彼らは自発的に、階級や学歴など個人の社会的背景をこえて互いの感情を通い合わせたのである。

6

染は営倉入りが終わって「あんなもんくらい、こたえっかしまへんがな」という。この言葉からは染が終始肚のすわっていたことが分かる。木谷はこの後、衛兵交代の際につけこんで扉をよじ登って逃亡する。陸軍刑法において、上官に対する暴行は「十年以下ノ懲役又ハ禁錮」（暴行脅迫及殺傷ノ罪）第六〇条二、逃亡は三日を過ぎれば「六月以上七年以下ノ懲役又ハ禁錮」（逃亡ノ罪）第七五条二）となる。ただし作品では、木谷は三日後には南方に向かう輸送船のなかにいることになっているので、処分は下されなかったと推定される。木谷は「真空地帯をうちこわす」ために実力行使——たとえそれが軍組織全体に影響を与える力はなく、個人の衝動に任せたものにすぎなかったとしても——に出た。それに対して曾田は何をしたのか、あるいは何をなそうとしていたのか、この作品からはみえてこない。佐々木基一は、「戦争中に「真空地帯」を破壊するなどのような人物が実際にいたか、木谷のような人物に望みを托さねばならなかったのも已むを得ないことではないか」という人は、もう戦争が終って七年にもなることを、もう一度よく考えてほしい。戦争中と同じ認識しかもためということは、リアリズムとは無縁な

ことがらである」と痛罵した¹⁶。曾田は、木谷が口を閉ざしてくれたおかげで軍法会議にかけられずに済んだ、ただそれだけに終わってしまう。軍組織の圧倒的な力の前に兵士個人はなす術もなく、ひたすら服従するしかなかった。《仕方がない》という諦観の言葉が聞こえてきそうである。佐々木が指摘するように、曾田の心理描写は「一個の転向小説」にはかならなかった¹⁷。『暗い絵』の深見進介は、急進的な仲間たちとは距離をおき、《やはり、仕方のない正しさではない。仕方のない正しさをもう一度真直ぐに、しゃんと直さなければならぬ。それが俺の役割だ》と感じていた。しかし実際には、検挙されて転向して出獄し、生活費を得るために軍需工場に務めることになった。「常に俺自身の底から俺自身を破ってぐぐり出ながら昇って行く道、それを俺は世界に宣言しなければならぬ」という深見の決意がどのように実行に移されたのかは、『暗い絵』には描かれていない。それと同じように、曾田がこれからのようにして自己の道を切り拓いていくのかは、『真空地帯』には何も描かれていないのである。

野間も『暗い絵』の背景」（『学生評論』第四号、一九五〇年二月）という回想記のなかで、大阪市役所に勤務していた頃、小野義彦——『暗い絵』の羽山純一モデル——たちと社会科学に関する研究会を開いていたことに触れている。小野のもとに召集令状が届くと、彼は研究会のメンバーに向かって、「軍隊内で反戦運動を必

ずおすこと、それから軍隊の機密を何等かの手段で報らせる。そして、互いに連絡を失わないようにしよう」と提案した。小野は入営してからも「次々と葉書、手紙を精力的にかいて、軍隊の欠陥を、或いは兵隊達の心境を知らせてきた」ところが、「次にしばらくしてから、他の者に赤紙がきたときには、すでにその様子は変わり、私達は漸次、意気を失ってゆき、全く暗い気持ちにとりつかれていった」。仲間たちは互いに「孤立」し「孤立すればするほど動揺がはげしくなったという。「組織をもたずして確乎として自立してゆくということ、ほんとうにむつかしい」と痛感させられたのである。

曾田は、野間が感じていた「全く暗い気持ち」を克服し、他の兵士たちとの信頼関係のなかで「確乎として自立してゆく」ことができるのだろうか。木谷の事件を通して知った師団首脳部の不正と腐敗墮落を管外に知らせ、世論を喚起して軍組織に対する批判の声をあげることができののだろうか。

ここで穿った見方をすれば、『作者』のポジションに立つ野間自身、『真空地帯』の創作を通して、曾田の担った責務を果たそうとしていたと考えられる。野間によれば、軍隊の内部を告発するこの反戦小説のなかに「人間を新しくみる眼をつくりだしていく」だけではなく、作品のなかに「その眼を生々と封じこめ、読む人がそれをよんでひとりでその眼を自分のものにする」ことを可能にする仕掛けを凝らした。『青年の環』で探求したものを、多くの読者

にいかにしてつたえ、大衆と共感し、共応し合う世界をつくりだしていくかを考えた」というのである¹³。

野間にとって『真空地帯』の執筆は、非転向のまま獄死した布施杜生の遺志——『暗い絵』の木山谷吾のモデル——を継ぐものであったと意味づけられるのではないか。京大ケルンの同志野口俊夫が入営する際、野口が「兵士に対し左翼的啓蒙の役割を分担すべき旨の決意」を告げると、布施は彼を激励したとされる（『特高月報』昭和十八年八月分）。木谷を助けながらもつぎは自分が検挙されるかもしれないと感じる曾田の強迫観念は、野間が「僕の順番が来るかも知れないと恐れながら、彼の差し入れを最後まではたすことができた」という布施に対する救援活動の体験に重なるところがあつたと考えられる（『布施杜生のこと』、「短歌新潮」第一卷第二号、一九四八年九月）。戦後になって表現の自由が確保されるようになる、野間は、反戦・反軍思想の啓蒙を強く意識しながら『真空地帯』を創作し、地域人民闘争で連帯していた人びとの間に、さらに一般読者とも広く分かち合える作品として完成させたのである。

たとえ「自分が正しく潔白に生きる」努力を試みても「一人だけの正しさは、何になろうか」（『孤立の抵抗』）——実際、一兵士としての野間にはその可能性が残されていなかったように、戦時下抵抗の有効な方法を作品のなかに具体的に描き出すことができなかった。しかし軍隊組織の真相を暴露するというストーリーを巧みに構

成し、読者に強い衝撃を与える作品を発表することによって、民主化と非軍事化に逆行する勢力が台頭する戦後社会に警鐘を鳴らしたのである。

他方、木谷を実力行使に駆り立てたのは、花枝の声であった。輪送船に乗った木谷の胸裏には、花枝の面影が浮かぶ。「ああ、木谷には自分を可愛がってくれたものは、彼が生れてから今日までの間にただこの花枝だけだという思い出がある」と、作者の視点からの描写がある。岡山北部の農村に生まれた花枝は、大阪からきた周旋屋の男に売られて「女郎」になったとされる。恵まれない境遇で育った者同士に通う共感、これが作品の結末で示された木谷の心境であった。個人の社会的背景をこえて連帯しようとする野間の理想はどこへいつてしまったのだろうか。兵士と売春婦、兵士と慰安婦という関係は、ある意味で通俗的な戦争小説のモチーフである。軍隊組織の内側を鋭くえぐり出しながらも、『真空地帯』が、このように陳腐な情緒で結末を迎えてしまうのは、野間の文学に限らず日本近代文学全体の限界であったのかも知れない。杉浦明平は「真空よりの脱出ははじめから失敗せざるをえない運命が与えられていた」という。そして「この主人公は、『暗い絵』の延長線上に、設定されたもので、組織的抵抗をもちえなかった戦時下日本の現実を踏まえていることはたしかだが、一つの未解決の問題を含んでいるとはいえよう」とする。軍隊組織に対抗するためには軍の外で抵

抗組織を結成する必要がある。しかしそれを可能とするには、兵士個人はあまりに弱く、戦前の日本社会は一五年戦争のなかで市民的自由が奪われてしまっていたのである。外国の歴史では軍隊のなかの蜂起、あるいは反乱軍の決起などがみられるが、木谷のような散発的なテロではなく市民の広範囲に及ぶ兵役拒否、あるいは総同盟罷業が求められるであろう。

注

『暗い絵』『真空地帯』の本文は、筑摩書房版『野間安全集』に拠った。『真空地帯』に関する評論では、大西巨人と宮本顕治の論争が知られているが、作品解釈の域をこえて、新日本文学会の運営方針にまでテーマが及ぶものなので、別稿を準備して取り扱いたい。なお本文中、今日では不適切な差別的表現がみられるが、当時の社会状況を理解するために使用している。

- (1) 太田恭治氏への取材は二〇一八年三月三日、リバイティ大阪にておこなった。
- (2) 野間宏「わが体験わが文学 政治と文学Ⅰ」(『第三文明』第二二五号、一九八〇年一月、一四頁)
- (3) 野間宏「少年の日の西宮」(『グラフィにのみや』、一九六八年三月)、『野間宏作品集』第九巻、一九八八年四月、岩波書店、七頁)
- (4) 野間宏・日高六郎『対談』日本人の戦争体験と『真空地帯』(『図書』第四三二号、一九八五年八月、八頁)。なお「当時差別を受けていた『夙』という地域』については、尾末奎司「野間宏と『往生要集』『わが塔はそこに立つ』を中心に」(『文学』第四〇巻第三号、一九七二年三月)、酒井真右『真空地帯』と『破戒』について」(『部落』第四一号、一九五三年四月)、紅野謙介「野間宏・〈大衆〉の原像——『真空地帯』をめぐる試論」(『文

学」第五四卷第一号、一九八六年一月、他の言及がある。

(5) 野間宏『文学入門』(一九五四年一〇月、春秋社)『野間宏全集』第二〇巻、一九七〇年一月、筑摩書房、九〇頁)

(6) 部落解放同盟西成支部編『焼土の街から 西成の部落解放運動史』(一九九三年二月、一八頁)

(7) 沖浦和光『『悪所』の民族誌 色町・芝居町のトポロジ』(二〇〇六年三月、文春新書、一三〜一四頁)

(8) 北博昭編『陸軍軍法会議判例類集』第二冊(二〇一六年一月、不二出版、二四九〜二五二頁)

(9) 荻野富士夫『よみがえる戦時体制 治安体制の歴史と現在』(二〇一八年六月、集英社新書、四五頁)

(10) 橋本あゆみ「大西巨人『神聖喜劇』における兵士の加害/被害——野間宏『真空地帯』との関係から」(『文芸と批評』第一一卷第一〇号、二〇一四年一月、三七頁)

(11) 大西巨人「俗情との結託『三木清に於ける人間研究』と『真空地帯』」(『新日本文学』第七巻第一〇号、一九五二年一〇月、一二四頁)

(12) 兵藤正之助「解説」によれば、『真空地帯』の「全巻にわたって、その底に脈々と、しかも重く沈殿しているもの、それこそは、野間氏が、かの「人民闘争」によって、感得したものに他ならぬと考えられる」という(『野間宏全集』第四巻、一九七〇年六月、筑摩書房、四〇三頁)。

(13) 沖浦和光「野間宏における『歴史の磁場』」(『文藝』編集部編『追悼野間宏』、一九九一年五月、河出書房新社、一〇〇頁)

(14) 対談「聖と賤の文化史——民衆文化の原郷を訪ねて」(『野間宏作品集』第三巻、一九八八年一月、岩波書店、三三三頁)

(15) 同右、三三四頁。

(16) 佐々木基一「『真空地帯』について」(『文学』第二〇巻第九号、一九五二

年九月、八三五頁)

(17) 同右、五二頁。

(18) 前掲(5)と同じ。

(19) 杉浦明平「解説」(『真空地帯』、一九五五年二月、岩波文庫、六〇四頁)

—— おにし・やすみつ、三重大学理事・副学長 ——

〔図〕

〔昭和前期のミナミ概略図〕(沖浦和光『『悪所』の民俗誌』から)

